
チート主人公にオブラートシリーズ没話

十八

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チート主人公にオブライトシリーズ没話

【Nコード】

N7018U

【作者名】

十八

【あらすじ】

没ネタです。

基本的には続きません。

更新できない時のお茶濁しに追加されるかもしれません。

先に考える者と天落ちる憂い

一先に考える者と天落ちる憂い（プロメテウスとビスケットハンマ
ー）

例えばこんな考え方がある。

世界の現在過去未来、その全てとあらゆる可能性を存在させるには、ただの一瞬があればそれで十分である、と……。

仮にこの世界が、どこかで一瞬だけ現れて消えた、なんらかのノイズのようなものしかなかったとしても、今ここに居る俺たちにとってはそれは紛れもない現実で、生きる日常は確固たる存在と、悠久の過去と、無限の未来とを備えている。

そんな思考実験に初めて触れたのは、確かグレッグ・イーガンの順列都市だっただろうか？

昔から考えすぎて、怖い考えと思考の迷路に陥る事が多かった僕は、それを読んでなんだか凄くホッとしたのを覚えている。

例えば今、天が落ちてきて、この地球が薄い焼き菓子の如くに爆ぜ割れ、その全ての命が消えうせたとしても、それでも今ここに居る僕らは、無限を内包しているんだ。

……天を眺めながらそんな事をぼうつと考えていたら、姉弟子の一人が『コウちゃんどうしたのー』と話しかけてきたので、内容を噛み砕いて説明した所、尋ねてきた当の本人はそ知らぬ顔でそっぽを向いて、もう一人の姉弟子は、『知ってる、それってきゆうつて言っただよね』と言って笑う。

杞憂、杞の国の憂い、不要な心配……。

けれどももしも……、もしも、とても不可能と思える事を成し遂げない限り、本当に天が堕ちてくると知ってしまったら？

僕は、天を見上げる。

そこにある絶望を、落ちてくる天を眺めて、息を吐いた。

青い空には、巨大な金槌が透けている。

そして、その傍らには、絶望と比べて遥かに小さな、デッドエンドしかない憂鬱な世界をぶち壊せなかった、かのエレクトリックな怪物が、確かに浮んでいるように僕の目には映った。

・ ・ ・

少しだけ、ぼくの事を話そう。

死んだと思ったら、僕は僕になっていた——それが当時の僕の、一番素直な自己認識だろうか？

年代のズレを除けば、両親も、家も、生前の、二十五歳の僕と同じで、死後の僕はそこから生まれなおし、人生をやり直している。

……そう、少なくともその頃の僕は、そう思っていたのだ。

因みに、死んだ後どうなったとか、産まれるのがどうだったとか、そう言った事は覚えていない。

丁度永い眠りから醒めるように、幼児時の断片的な心象だけを夢の記憶の様に幽かに残して、今際の際の記憶を残す二十五歳の僕は、いつのまにか五歳の僕になっていた。

とは言え、いきなり五歳の僕が二十五歳の意識と知識を得たわけではなく、ダウンロード時間と言うか、魂と肉体のギャップを埋める時間と言うか、そんな感じのモラトリウムが三年ほどあって、五

歳の僕はゆっくり今の僕になって行っただ。

かつての僕よりも、強くて優秀で、けれど、心の柔らかさだけは変わらない、八歳の僕に……。

そうして、非常に頭の良い大人びた小学生として、前世よりも恵まれた生活を送っていた僕が、初めておやと思っただのは、八歳の年の夏休みだった。

夏休みヒーロースペシャルと言う子供向け特撮の特集番組に登場した、愛玩超人インコマンと言う暑苦しいヒーローと、それについて調べる為に図書館を訪れた僕が見つけた、最近二巻が出たばかりだと言う時代小説、地獄手刀拳法。

前者三十三話には、確かにアフリカ暗黒拳法ヒポタスマン役で南雲総一郎が出演しており、後者の著者は蝉時雨先生で、コレは確か、朝比奈さみだれの父親のペンネームではなかったか？。

二十五歳の僕の記憶が確かならば、この二つは共に、惑星のさみだれと言う漫画——ある超能力者兄妹から始まる、世界を破壊する魔法使いと、それを守る精霊の姫と配下の騎士団の物語だ——に登場する架空の存在ではなかったか？

そう気付いて調べてみれば、出る出るわ……今まで、生まれ変わった自分と言う狭い範囲に閉じこもっていた僕の、外側にある違和の、数々。

例えば、空を眺めれば、浮ぶでっかいハンマーの影と、それと比べれば小さな憂鬱な世界をぶっ壊す怪物の影。

ここが、前世で死ぬ少し前に完結した漫画、惑星のさみだれの世界だと知っただのはその時の事で、けれども、その時の僕はかなり樂觀していた。

なにせ、原作はハッピーエンドに終わっているのだ。

喩え、空に浮ぶアレを見る事が出来ようと、そもそも指輪の騎士が高レベルのサイキック持ち以外には戦いに干渉する手段等ありはしないし、指輪の騎士の定員は既に埋まっている。

ならば僕は、安心して僕の日常を謳歌すれば良い。

そんな風に思っていたのだ。

あの日、あの人が僕を尋ねてくるまでは……。

「始めまして、高槻昂くん」

口髭を蓄え、伸びすぎたオールバックの白髪を尻尾にした初老の紳士は、僕に向かってそう言った。

「始めまして、秋谷稻近さん」

その呼びかけに、僕は思わずそう答えていた。

．．．．．

……こう言った文章を書くのは初めての事なので、とりとめもなかったり、冗長であつたりする点は許して欲しい。

これは、代役の物語だ。

世界を砕く魔王と、その騎士の物語ではなく、知らず、この世界のあるべきハッピーエンドを奪っていた僕が、師匠の助けを借り、舞台に登る事もなく物語から退場した人たちの代役を果たす物語。
バッドエンド
僕が、憂鬱^{バッドエンド}しかない世界を蹂躪する大怪獣になるまでの物語だ。

取り留めのない事を、冗長である事を許して欲しい。

教訓にならぬ事を、逆境の苦味を味わえぬ事を、成長の喜びがない事を、打破の爽快を欠く事を……。

これは英雄達の物語ではない。

ただ淡々と、運命と言う名の敵を相手に一人相撲をとったそんな愚かな男と、それを手助けしてくれた奇特で優しい人たちが、共に

歩んだ日々の記録である。

師に習い、物語の最後の、或いは、新たなる物語の始まりになる
だろう日の前の晩に、これを記す。

願わくば、僕の明日の行いが、あの兄妹に平穏な幸せを与えるも
のである事を……。

西暦三千

二百四十六年三月十八日、高槻昂 記。

「……お兄ちゃん、誰？」

「僕かい？」

僕の名は高槻昂、人呼んで……」

一先に考える者と天墮ちる憂い（プロメテウスとビスケットハンマ
ー）

.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7018u/>

チート主人公にオブラートシリーズ没話

2011年10月8日22時07分発行